

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18729002
 研究課題名（和文）現代アフリカ農村における「開発」と「文化」をめぐる社会人類学的研究
 研究課題名（英文）Anthropological study of 'development' and 'culture' in rural Africa.
 研究代表者：石井 洋子（ISHII YOKO）
 聖心女子大学・文学部・講師
 研究者番号：30431969

研究成果の概要：本研究は、以下の3つの課題を遂行した。（1）ケニア共和国ケレニヤガ県、ニエリ県およびナクル県でのフィールドワークを複数回にわたって実施。（2）上記のデータに厚みを持たせる作業として、2008年3月に実施したイギリスでのケニア植民地時代の資料を整理し、データ化した。さらに、（3）日本の援助機関における資料収集を通じて、開発と文化をめぐる研究に深みをもたせた。現代的な課題である開発援助とアフリカ社会の問題は、当該社会の定点的調査のみならず、現地社会、援助団体、国際世論など多様なアクターへの視角が必要となる事を再確認した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	600,000	0	600,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	150,000	2,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：ケニア共和国、開発と文化、社会人類学、ギクユ人、コメ

1. 研究開始当初の背景

東アフリカ農村社会における開発と文化研究は、緒に就いたばかりである。植民地時代に植え付けられたローカルな開発概念に加えて、第二次世界大戦後の開発政策は、地域社会においてどのように理解されているのか。今後、対アフリカ援助が拡大する前に、開発をめぐる人類学的調査が早急に必要となる。

2. 研究の目的

これまでの開発研究は、開発経済学や国際援助論の蓄積によって、マクロな政策研究が主となる。しかし、「参加型開発」や「パートナーシップ」などの援助考を背景に、地域社会への視点が重要である。本研究では、個別実証的な調査データを基礎として、開発と文化の連関を応用的なレベルにおいて考察する。

3. 研究の方法

本研究の主力となる方法論は、ケニア共和国におけるフィールドワークである。2度にわたって実施したケレニヤガ県、ニエリ県およびナクル県での調査では、従来の村落調査に加えて援助機関への調査など多面的な視点を得た。

一方、調査地の歴史的事実を掘り下げる作業もまた、開発計画の内面化、そして政策自体の変遷を考察する上で欠かせない。しかし、劣悪な資料の保管状況からケニア・タンザニア国内での史料調査には限界がある。また植民地時代の東アフリカでは、植民地政府と地域社会の間に開発をめぐる交渉の歴史があったが、その事を記した多くの資料（イギリス人行政官によって記述された各種の統治資料など）が旧宗主国イギリスに持ち帰られた事実も把握している。同調査では、開発過程における地域社会と政府の関わりを歴史的コンテクストのなかで捉えなおす目的において、イギリスのロンドン大学東洋アフリカ学院および国立古文書館での関係資料の収集を行ない、幅広い視野における開発と文化研究を行なった。

4. 研究成果

以下、本研究テーマに関わる業績について、いくつかのテーマに分けて説明する。

(1) ポリティカル・エコノミーの変化と開発計画-地域住民の戦略をめぐる

2005年に提出した博士論文で明らかになった問題点をさらに深め、フィールドワークをもとに実証的研究への歩を進めた。

まず、通底する問題点として、サハラ以南アフリカが、21世紀を迎えた現在もなお、多くの苦しみに喘いでいるという看過できない点がある。急激な食糧高騰やHIVの蔓延によって、人びとの日常生活は壊滅的な状態となり、多くの避難民や死者を出した政治的・社会的混乱により、政府への信用は完全に失われている。こうした状況を背景に、アフリカへの支援の必要性が厚く語られた現状がある。

ところが本研究に基づくフィールドワークでは、開発プロジェクトの中心にいる人びとが「貧しさの語り」に包み込まれ、生活環境の悪化に苦しんでいる様子が浮き彫りになった。また、近年のポリティカル・エコノミーの動きに伴う開発計画の変化や、地域社会の反応といった微細な動きを描出する必要性が生じてきた。そこで、石井(2006)「誰のための開発援助か?」、石井(2008)「開発の人類学」、石井(2007)「経済グローバル化と特産品のゆくえ」、石井(2007)『開発フロンティアの民族誌』では、従来の調査地であ

るケニア中央部のケレニヤガ県ムエア郡に展開する、政府主導の開発計画と、地域住民であるギクユ人社会に注目した。そして、主要産物であるコメの生産・流通の自由化がハード・ランディングに開始されたのちに、社会が大きく混乱していくなか、主体的に生計戦略を考案し、激動を生き抜こうとする人々の姿を描いた。

莫大な援助資金と政治力を兼ね備えた開発プロジェクトは、人間中心的な開発とはなりにくい。合理的な経済システムの導入によって、効果が数値として表れにくい、草の根レベルの営みは低く評価されてしまう。これらの論文では、地道な努力を看過し、社会的文化的な配慮を後回しにする開発計画は、地域社会に大きな葛藤を生み出す危険性を孕んでいるという警告を含み論じた。

(2) 開発計画の負の局面としての健康被害

変わらぬ問題意識として、従来の経済至上主義に拠らない開発援助のあり方、そして内なる発展のあり方を模索する必要性を論じた。

再度注目したケニア中央部の大規模な近代的灌漑プロジェクトでは、日本政府からの援助を獲得し、大幅な経営黒字を生み出すほどのコメの増産に成功した。しかし同時に、石井(2009)「人間の安心と開発援助」では、開発実践の現場での人びとの「安心」が等閑視され続けている実情を論じた。

具体的に述べると、その地域では熱帯病の蔓延や生活用水の汚染によって住民たちの健康被害が日常化しているという点である。水道や電気が整備されていない入植村では、プロジェクトの始まりから問題視されていた水を媒介とする病気が蔓延しており、近年の人口過密な状態によって状況は悪化している。上記論文では、現地での「原虫・寄生虫感染症」および「細菌感染症」について数値を加えながら論じ、開発による負の側面に目をつむり、経済成長を絶対視しようとする暗黙の了解に対して、一石を投じた。

なお、本稿では新たな課題として、日本政府によるダム建設についてもふれた。しかし、ダム建設は現地社会の風景を変え、人びとの生活様式を新たに律していく大きな力となることは、これまでの研究で明らかである。また、地域住民の健康や安全といった一連の問題も据え置かれ、メンテナンスの問題も残る。本研究が残した今後の課題として、莫大な日本の「援助努力」が、人間の安心を支える助けとなること、さらに資源を融通させる現地の協力体制を壊さず、健康をむしばむ問題群の解決を目指すものとなる具体的な指標をしめしたいと考える。その際、開発支援者が、地域住民の描く未来への展望を具体的

に知り、現地社会の可能性を示す諸条件を丹念に調べることは、とても大切な作業である。

(3) 民族運動の高揚-マウマウの戦いをめぐって

ケニア独立後、ケニア中央部の開発・発展の土台となったのは、「マウマウ」と呼ばれる社会運動である。石井(2007)「先住民運動としてのマウマウ-英領東アフリカ・ギクユ人社会の政治過程」および石井(2007)「マウマウの娘」では、マウマウの戦いを描き直す作業として、政府の「記録」と人びとの「記憶」という媒体を取り上げた。そして、この両者の間にどのような認識の齟齬が見いだされるのかについて論じた。

1950年代、英領東アフリカのケニアでは「マウマウ」と呼ばれる先住民運動があった。白人入植者によって土地を奪われ、無産化した人びとの一部が土地の返還を求めて立ち上がり、ゲリラ活動を展開した運動である。56年まで続いたこの運動は、ケニア中央部のセントラル州を激戦地として大きな爪痕を残したが、イギリスからの独立の時期を早める結果をもたらしたとして一定の評価を受けている。上記の2論文では、独立前夜のケニアに繰り広げられたマウマウの戦いに注目し、そのいくつかの動きを多角的に捉えつつ、植民者によって収奪された権利を克服しようとする先住民運動の政治的過程を明らかにした。

以上、歴史的な視点と共時的な視点をクロスオーバーさせ、開発と文化の総合的な理解を目指して研究を進めた。これらの業績は、さらなる研究意欲を沸かせるものである。すなわち、近年のアフリカ救済を是とする国際世論の高まりは、開発プロジェクトや援助資金の拡大を促すものであるが、それを具体的に支える現地社会の人びとの日常生活をどう考えるのかという点である。この点をふくめて、一層、研究に精進していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

石井洋子「人間の安心と開発援助」、『国際開発学研究』勁草書房、3:97~109. 2009年、査読有

石井洋子「開発の人類学-中央ケニア・ギクユ人社会におけるムーブメントと経済変容」、『経済学論纂』中央大学経済学研究会、48(3・4):27~50. 2008年、査読無

石井洋子「京大式フィールドワーク入門」

(特集・人類学的フィールドワークとは何か)(書評論文)『文化人類学』日本文化人類学会、72(3):425-427. 2008年、査読有

石井洋子「マウマウの娘-あるケニア人女性の回想」(書評論文)『アフリカ研究』日本アフリカ学会、71:174-176. 2007年、査読有

石井洋子「誰のための開発援助か?-対アフリカ援助をめぐるポリティックス」、『国際開発学研究』勁草書房、5(2):3-15. 2006年、査読有

[学会発表](計6件)

石井洋子「開発の『正義』と見えない対価のはざま」、基盤研究(B)課題番号20401046(海外学術調査)研究代表者:宮脇幸生(大阪府立大学人間社会学部)「開発と国家支配-連邦制国家エチオピアにおける開発エージェントと国家権力の相克」研究会、2009年3月30日(於:京都大学)

石井洋子「隣人・クラン・地域社会」、『アジア経済研究所「アフリカ農村における住民組織と市民社会」研究会、2008年10月25日(於:上智大学)

石井洋子「開発・難民・地域社会:東アフリカの事例から」、『仙台アフリカセミナーの会、2008年9月18日(於:戦災復興記念館)

石井洋子「地域開発フォーラム」コメンテーター、第45回アフリカ学会、2008年5月25日(於:龍谷大学)

[日本アフリカ学会HP
(<http://www.soc.nii.ac.jp/africa/>)
にて掲載]

石井洋子「開発と生活リスク」コメンテーター、第49回現代人類学研究会(於:東京大学)、2007年7月28日

[現代人類学研究会HP
(<http://anthrop.c.u-tokyo.ac.jp/2007/2007.html>)
にて掲載]

石井洋子「『開発フロンティア』空間における人類学的実践」、『第145回アフリカ地域研究会、2007年6月21日(於:京都大学)』京都大学アフリカ地域研究資料センターHPにて発表要旨掲載]

[図書](計4件)

石井洋子、弘文堂、「経済グローバル化と特産品のゆくえ-中央ケニア・ギクユ人社会における資源開発の現場から」、『内堀基光ほか編著『講座 資源人類学:第4巻、

小生産物の鼓動と躍動』、2007年、pp.283
～315.

石井洋子、御茶の水書房、『開発フロンテ
ィアの民族誌』、2007年(平成18年度科
研費研究成果公開促進費受領、課題番号
185147)

石井洋子、明石書店、「先住民運動として
のマウマウ - 英領東アフリカ・ギクユ人
社会の政治過程」、綾部恒雄編著『講座 世
界の先住民族、ファースト・ピープルズ
の現在：第10巻、失われる文化・失われ
るアイデンティティ』、2007年、pp.146
～161.

石井洋子、時潮社、『食』をささえる国
際援助-ケニア穀倉地帯の風景から」、河
合利光編著『食からの異文化理解』、2006
年、pp.185～203.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石井 洋子 (ISHII YOKO)
聖心女子大学・文学部・講師
研究者番号：30431969

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし